

ISBN978-4-87354-500-4
C3098 ¥3500E
定価(本体3,500円+税)



9784873545004



1923098035008



中国現代文学論考

萩野脩一 著

関西大学
出版部

中国現代文学論考

萩野脩一 著

関西大学出版部

中国現代文学論考

萩野脩一著

関西大学出版部

【本書は関西大学研究成果出版補助金規程による刊行】

はじめに

ここに収めた文章は、私が最近関心を深めている五七幹部学校に関するものと、中国現代文字について書いた文章である。

最近私は五七幹部学校に関心を寄せ、調査研究をしている。それは文化大革命（文革と略称する）への私の関心からするものであり、とりわけ知識分子に対する関心からでもある。知識分子という言葉を身近に感じたのは、私が大学院生であったときの学園紛争であった。私は知識分子に当てはまらないと思っていたのだが、大学院生としての私は立派な知識分子となるのであった。この落差が、今も実は埋まっていない。

学園紛争で感じたことの一つに、大学教授といつても一介の庶民と異なることはないかということであった。知識分子の代表たる大学教授も、生活感覚としては庶民である、ということが強く私に根付いた。文革中の中国の知識分子たちも、私には知識分子の模範を示してくれる者は一人もいないように見えた。少なくともそういう人物は伝わってこなかった。私が知識分子にふさわしいと漠然と密かに感じていた人物は、時の動向に敢然と立ち向かう理性の人というものであったから、知識分子といわれる者の知識分子らしくない有り様に幻滅した。

文革についてすこし知るところとなると、文革といっても時期的な変遷があることがわかった。十年の災難と中国では言うが、十年のうちには当然波があった。文革は、最初の紅衛兵が活躍する時期と、次の上山下郷の時期、

そして一九七五年の第四期全国人民代表大会開催の時期など三期に分けられよう。或いは、一九七一年九月に林彪が墜落死したことは、外国人にはしばらく秘密にされていたが、中国国内の人々にはやはり大きな影響がある事件で、密かに口コミで次々と伝わったらしい。この事件はいまだに真相がわかっていないが、明らかに異常な、価値観の動揺をきたした事件であったようで、知識人を随分と目覚めさせたのであった。上からの主義主張に盲従している自分たちの馬鹿らしさに気づいたのであった。だから、文革は四期に分けられるかもしれない。

私は文革の分期をしようとしているわけではない。ただ、上述のように分けた第二期の上山下郷の時期というのは、紅衛兵を主とした言い方であり、若者を山奥や僻地に進んで行かせて、そこで革命の実践に従事し、その土地の変革を起こさせようというものであった。知識分子にとつては、それは、五七幹部学校の時期ということになる。このことに先ず、私は気づいた。そして、五七幹部学校は意外にも大規模で、真剣に、継続的に行なわれたのであった。それゆえ、知識分子のみならず、その子供たちにも大きな影響を与えたものであったことに気づいた。たとえば、李銳の長編小説『旧址』には李乃之という人物が幹部学校で死ぬことが描かれているが、これは作者・李銳の父親がモデルである。現在五十歳以上の人は、多く父母が五七幹部学校に入っていて、家に一人残されたり、家族が離れ離れになったりして孤独な生活をした経験があるものだ。毛丹青の「老牛の目」という散文にもそのことが書かれている。

中国の知識分子は、文革によってその存在のあり方を否定され、破壊され、分解されたと言えよう。そのことを知り、跡づけるのが私の最大の関心事となった。五七幹部学校は建前としては、頭脳労働ばかりをしていて進むべき道を誤った知識人を肉体労働と学習を通じて再生することを企図した施設であった。そういう意味で壮大な実験でもあった。私はこの実験は失敗したと思う。しかし、知識分子の存在と必要性は相変わらず社会基盤として残っ

ているから、現在の知識分子は、五七幹部学校に入れられた知識分子とは完全に異なった形態と意識を持つことになるだろう。知識を肉体労働で転化できるかどうかということをも身を以って知ったという意味で、五七幹部学校という制度は現在の知識分子に活かされていると思う。ここに五七幹部学校を調査し研究する意味もある。

それゆえ、私は時期的には三年からせいぜい五、六年の短い期間であつたが、五七幹部学校は中国において重要な問題を内包していたと思う。それはきつと日本を初め世界の国々においても有益な資料となることと思つている。「三つの視座」として入れた論考は、以前私が話したり、書いたものであるから、現在には一見役立たずのものになつていくかに見える。私自身も最初はもう古くなつたと思つていた。しかし、現在の文学の混迷状態を見るにつけ、とりわけ中国においてもそういう状態が始まつているが、そういう混迷状態を見る視座としてあい変わらず有効なものではないかと思ひなおして、三つの観点よりする文章を特にこの論考に入れた。庶民生活、都市と農村、文学作品としての故事、この三点である。

最近では中国の作家が来日することは珍しくなくなつた。とても喜ばしいことではあるが、彼らの作品がどんなものであるか一応の理解を得ておく必要がある。そこで、現在の中国の時代状況を肌で感じ取つていよう作家についての記事を入れた。私が関心を寄せた莫言などの作家は、時代の動きをかすかにであれ体感して、発信している作家である。時代が変動している中であつて、渦中に生きている人々の息づかいこそ文学として吸収し表現するべきだと思ふからである。したがつて単に風俗的に描くばかりが作家の仕事ではないと思つているし、売れている流行の作家を追跡してはいない。

そのほか、付録として、「支那通」というものについて書いた文章も入れたが、これはそもそも謝冰心についての調査から、澤村幸夫という人物に行き当たつたものである。その人物と魯迅との接触到、人と人との交流の難し

さを感じたので、あえてここに入れることとした。

このような私の中国現代文学に関する狭隘な雑多な視点からする考察も、多くの方々の学問的教示と援助を蒙っている。いちいちお名前を挙げないが、どうか心から感謝していることをお汲み取り願いたい。具体的作業としてパソコンに打ち込んでくれた高橋佳子さんや、索引を作成してくださった山田多佳子さんなどがある。多くは語らないが、お礼を申し上げる。

最後に、この本の出版を許可してくださった関西大学・楠見晴重学長と、出版部の方々に厚くお礼申し上げます。また、内田慶市先生と井上泰山先生は、本書の出版申請の推薦状を書いてくださった。そして、石坂恒先生は文学部の委員として推薦してくださいました。心よりお礼申し上げます。

二〇一〇年四月一日

(追)六月から急に腰痛のため足が動かなくなり、大学も欠勤することになった。この間、出版部をはじめ多くの方々に迷惑をおかけした。ここに記して、お詫びし、また、謝意を表する。

著者 識

中国现代文学论考
目次

二	文学にみられる都市と農村	205
三	文革新後の二十年	221
III 莫言及び他の現代文学の作家		
一	莫言の『豊乳肥臀』	237
二	莫言の『ベール』	260
三	莫言の『四十一炮』	267
四	小説の難しさ	269
五	葉広芩の『貴門胤裔』	273
六	高行健の『母』	275
七	蘇童——嗅覚の作家	283
八	李銳の『太平風物』	285
九	金子わこ訳『じゃがいも』	288
十	余華の『兄弟』	291
十一	茹志鵬追悼	295

十二 山西省の作家・焦祖堯……………298

IV さまざまな視座

一 とても面白い本——『嵐を生きた中国知識人』……………321

二 待望久しい本——『中国低層訪談録』……………324

三 岡田祥子編訳『新中国を生きた作家 蕭乾』……………326

四 木山英雄著『人は歌い人は哭く大旗の前——漢詩の毛沢東時代』……………330

五 北岡正子著『魯迅 救亡の夢のゆくえ——悪魔派詩人論から「狂人日記」まで』……………336

六 阿辻哲次氏の著書三冊……………338

七 井波律子著『中国の五大小説（上）』……………344

八 爽快な本——『コオロギと革命の中国』……………348

九 映画『孔雀』について……………351

十 ラスト・コーション……………353

V 付録

一 「支那通」について……………359

二 魯迅と合わなかった、ある「支那通」…………… 379

初出一覧…………… 403

人名索引…………… 420